

2023年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

本校の教育理念	創立者福澤諭吉が唱えた「独立自尊」を教育理念とし、未来の先導者の育成を目指している。 本校は中高一貫6年制の男女共学校として1992年に開校し、横浜初等部を含めた小中高一貫校として3年目を迎える。 情操豊かで、創造力に富み、思いやりが深く、広い視野に立って物事を判断し、社会に貢献できる人、社会的責任を自覚し、知性・感性・体力にバランスのとれた教養人の育成を教育目標としている。
本校の特色	基礎を確実に身につける、きめ細かな指導を基本とし、開校以来、語学と情報リテラシー教育に力を注ぎ、「異文化交流」と「情報教育」を教育における大きな柱としている。 本校では、帰国生が中等部では約20%、高等部では約25%という高い割合を占めており、異文化の交流が自然な形で学校の中で生まれている。 二人担任制を導入し、きめ細かい生徒対応を目指している。

【2023年度総括】

●教科教育活動について

開校以来、各教科とも一貫校の特性を生かし、中等部は基礎的知識の習得、高等部では習得した知識を基に論理的思考や表現力を養う活動を行い、中高で継続的、発展的な教育内容になるよう配慮している。 2023年度は新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置付けが、5月8日から5類に移行し、政府から一律の感染対策が求められなくなった。このため休校によるオンライン授業は無く、通常の対面授業が1年を通じて実施された。 本校では中等部の理科や家庭科、情報が実施しているチームティーチング制を昨年度から中等部1年生の体育でも導入し、安全面に留意しつつ、きめ細かな実技指導が行なわれた。4年数学は少人数教育により理解度を高める授業を実施している。本年度より、高等部5年生のカリキュラムが新指導要領のカリキュラムに移行した。世界史探究と公共が必修となり、6年生での世界史の学習や進学時の学部選択を意識した授業が実施された。 理科では校外学習として横須賀市自然・人文博物館の見学を行った。また、各教科で、SDGsを意識的かつ積極的に授業に組み込むことは継続的に行なわれた。国語科では各学年においてSDGsの17の目標のうちいずれかの目標と関連づけられる内容を扱った。社会科2年地理分野では、世界へと目を向けてSDGsについて意識を深めた。理科では、物理・化学分野で脱炭素化・クリーンエネルギー・資源リサイクルなどのトピックをとりあげた。生物・地学分野では学校周辺の自然環境調査を通じ、地球環境の保持と利用について理解を深めた。家庭科では、食品ロスやゴミ問題、消費生活、おもちゃ製作実習、ジェンダーや働き方、格差や経済、妊娠体験実習や高齢者疑似体験実習などの学習活動を通じてカリキュラム全体で、SDGsの17のゴールのすべてを1年生から6年生のカリキュラムで網羅している。間接的なSDGsの学習として、情報科では、タイピング入力練習のサンプルテキストをSDGsゴールにして読む機会としたり、英語科では、教科書の題材がSDGs関連の物が多く、生徒の意識を高めるのに役だっている。本校の教科教育活動は、学年、教科区分ではなく、総合的に融合的に展開されていることが再認識された。
--

●委員会活動について

各委員会は、本校の教育目標が達成されるよう設置され、全ての教員が参画している。毎年各々が管轄する教育場面において生徒の安全や、教育効果を検証し評価している。 新型コロナ5類移行に応じて、感染症予防の意識はしつつ、「通常」への移行を強く進めた1年であったといえる。教員室の生徒立ち入りが原則解禁されたことは特徴的といえよう。 今年度は、1～5年ではほぼ新型コロナ禍以前に形で宿泊を伴う旅行を行なうことができた。6年は日程を短縮したものの、新型コロナ禍以前で行っていた訪問のかんりの部分を再現することができた。一方で食物アレルギーへの対策の負荷が上がってきている事実もある。 国際交流においては、新型コロナ禍以前に行ってきた一部のプログラムが再開したが、相手国の規制強化に従い従前の内容では実施が難しいものもあり、プログラムの再開発を行う必要が出てきている。 文化祭については、事前申し込み制は維持しつつ、入場人数制限を緩和し、来場者を迎えて行なうことができ、6年生は、150番教室と各教室での劇企画を行うことができた。またステージ公演の席数を増やすこともできた。 芸術鑑賞会は歌舞伎座での歌舞伎鑑賞を行なうことができ、情操教育の一助を担うことができた。 クラブ活動は体連・文連ともに制約はあったが、活動を行えた。教員の負荷軽減のために、慶應義塾の「臨時職員制度」の活用をより促進したい。ただし、施設不足についてはまだまだ改善の余地が残されている。 広報活動に関しては、学校見学会を4日対面形式で行なうことができた。また、生徒による学校紹介動画の公募を行い、優秀な作品を数多く制作することができた。 本年度はいじめの重大事案は発生しなかったと認識しているが、その兆候をより早く把握できるよう対策を講じている。 今年度より「未来の学校検討委員会」を設置し、今後の学校のありかたについて検討していくことになった。新型コロナ禍を乗り越え、通常が取り戻されているが、将来に向けてさらなる改善が必要とされている。

2023 年度 学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

I. 教科における自己評価

評価方法	年度当初に各教科の学年、分野毎に授業担当教員が授業計画と目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に、授業計画の実施状況と、目標の達成度について授業担当教員が4段階で評価を行う。 A 達成できた（80%～100%）／B ある程度達成できた（60%～79%）／C あまり達成できなかった（40%～59%）／D 達成できなかった（～39%）
総合評価規定	各教科の学年、分野毎の評価を集計し、以下の計算で算出されたものを総合評価とする。 各分野と学年の評価を数字に換算 A→4 B→3 C→2 D→1 その平均を総合評価点とし、下記基準でアルファベット4段階とする。 A 達成できた（総合評価≧3.2）／B ある程度達成できた（総合評価≧2.4）／ C あまり達成できなかった（総合評価≧1.6）／D 達成できなかった（総合評価<1.6）

教科	目標と具体案	結果	次年度への課題と対策	中期的な課題	前回評価	今回評価
国語	国語科は下記のゴールにしたがって、各学年で実践の形態を考えて教科指導を行う。「具体案」は右記「結果」に寄せることで示す。 ・あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。 ・あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する。 ・すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。 ・ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児のエンパワーメントを行う。 ・包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用ディーセント・ワークを促進する。 ・強靱（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進・研究開発従事者数の増加を図る。 ・各国内及び各国間の不平等を是正する。 ・包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する。 ・持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する。 ・陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。 ・持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。	【全学年】 年間を通じて実施した漢字テスト(4) 特に中等部では GIGA PC の活用を踏まえ、Zoom による ICT の推進(9) 【1年】 自分の住んでいる町を紹介する説明文を書く(11) 様々な本屋の工夫を調査し、本との出会いを魅力的にするアイデアを考える(11) 中学生の制服に関する意見文を書く(1・5) 年賀状の書き方、書き初め、ポスターを書く(4) 【2年】 あらゆるジャンルの本を読み、社会のいろいろな問題に目を向けるきっかけを作る（1・3～6・8～11・14～16） 学校給食に関する意見文を書く（1・3・4・6・8） 図書館利用についての意見文を書く(4・9) あの人が残した文字、包み紙の書き方、原稿用紙の書き方、書き初め、新聞を書く(4) 【3年】 四国・広島修学旅行に先立つ読書（11,12,14～16） 社会科公民分野の学習と時期を合わせた読書（1～17） 年度の後半に週一回ペースで行った、全員参加形式ニュース報告ワーク（1～17） 【4年】 以下のように言葉や言語文化に関する知識・技能、思考力・判断力・表現力、志向を養った。 ①漫才づくり（4・5） ②スパイダー議論を用いた芥川龍之介「羅生門」読解（4・5） ③藤沢市地域探究論文執筆（4・5・14・15） ④「美しいもの」随想執筆※SFC キャンパス内の散策を伴う（4・5・14） ⑤川端康成「十六歳の日記」読解 ※作品読解に留まらず国語科・公民科の合同授業を行い生命倫理についても考察した。（3・4・5） ⑥百人一首 ⑧俳句の吟行と句会（春季・冬季開催） ⑨古典作品を解釈する 【5年】 能狂言鑑賞教室(4) 京都修学旅行と梶井基次郎「檸檬」(4) 夏目漱石『こころ』で近代を知る(4・16) DA ノーマン「誰のためのデザイン？」(9) 京都修学旅行。寺社に人が行く理由を観音信仰から考える（4） 京都奈良飛鳥の自然と風土について考える（4・15） 中国諸子百家にみる「水」について、「正直」のあり方について（3・4） 『伊勢物語』東下りの東海道からわかる地理と生物（4・15）	一見関わりのないように思える国語科の営みが、SDGs と如何に繋がってきていたか、如何に繋げていくかを、より深い所で考察し、共有しながら課程を進める。	高等部での新カリキュラムにおいて、来るべき6年を見据えた編成を考える。	A	A

		『平家物語』忠度都落平家滅亡、無常を考える(4・16) SFC キャンパスの自然を通して俳句を作る、吟行句会(4・15) 【6年】 現代文学に通底する思想について理解した(4・16)「山月記」「舞姫」等 戦時下における文学の状況について関連教材を通して理解した(16)「日本文化私観」等 古典の四季と和歌について 『史記』伯夷と叔斉など 『伴大納言絵詞』『信貴山縁起絵巻』やまと絵について 『長恨歌』について、生徒による発表 篆刻、写経、創作(4)				
社会	中等部では地理・歴史・公民の三分野にわたり、バランスよく基礎学力を習得することで、多角的かつ幅広く社会をとらえる視点を持つことを目標とする。 高等部では、学部選択を見据えて各科目高度な専門的知識を習得するばかりでなく、習得した知識を用いてアウトプットできるようにプレゼンテーションや論述の機会を多く設ける。 修学旅行や特別カリキュラムを通して史跡や企業・公的機関への見学を実施し、実際に自身の目で見ることにより、授業で習得した知識について考え、理解する機会を設ける。同じく、様々な業種の方々から直接話を伺うプログラムを実施し、将来的なキャリアに対する意識形成も目標とする。	中等部では、1年生で地理・歴史分野を学習した。基礎的な知識の定着を狙いとするが、教科に対する意欲や知的好奇心はあるものの、中学入試で社会を受験していない生徒を中心に知識定着には苦勞をしている印象があった。 2年生の地理分野では、1年生で学習した内容をより進め、世界へと目を向けてSDGsについても意識を深めた。公民分野では、政治分野を中心に基礎的な学習を行い、次年度に向けた知識定着を図った。 3年生では、歴史・公民分野を学習した。歴史では史料の解釈など、物事の多角的な見方を身につけ、公民では政治・経済ともに日々更新される時事的な情報に常に触れることの重要性を理解できた。また、経済分野では「株式学習ゲーム」を取り入れ、実際の経済状況の変化と株価の連動を実体験することができた。 高等部では、4年生で「地理総合」「歴史総合」を学習した。昨年度から新設された科目ではあるが、引き続き包括的なグローバルな視点での授業を実施することができた。 5年生では新カリキュラムの施行により、「世界史探究」と「公共」を新たに実施した。「世界史探究」では6年次にも引き続き学習する事を見据えての授業展開を行った。「公共」はこれまで6年次に学習していた「政治・経済」の流れをくむ内容として、将来の学部選択・職業選択を意識して実施している。 6年生では旧カリキュラムの最後の年度として、「政治・経済」、「倫理」を従来通り実施した。より専門的な内容を学ぶことで、自らの考え方の幅を広げ、差し迫った学部選択に寄与することを意識して展開することができた。 特別カリキュラムでは、物流見学、租税教室・キャリア教育プログラムを参加人数の制限はありながらも、コロナ禍前とほぼ同様のものを実施することができた。	中等部では、2年生の社会が地理・公民分野で分割することとなった。学習内容と生徒の負担のバランスをいかにとるかが課題となる。また、中等部段階で扱う内容についての取捨選択についても検討を重ねたい。一方で、単なる知識の詰め込みに陥ることのないように留意し、現在有している知識からどのようなことが考えられるのか、論理的な思考力の育成も重視する必要がある。プレゼンテーションやレポート・論述問題により、その課題に取り組みたい。 高等部では、引き続き大学における「研究活動」をターゲットとし、6年生「論文実習」の履修を前に、論理的思考力をより養い、客観的論述の訓練をすることが必要になる。論理的思考力を高めるためには、一定の知識も必要であるということを意識させ、知識の定着と思考力の育成の好循環を図れるようにする。 6年生で政治経済が行われなくなることに伴い、これまで6年生特別カリキュラムで行ってきた内容をどのように実施するか検討する必要がある。	初等部との関係の方法を模索しつつ、中高6年間のカリキュラムについて引き続き検討を行う。 中等部においては帰国生などを中心とする基礎知識の未定着に対し、どのような対策を講じるべきか、「社会科」への興味関心を惹きつつ最低限必須とする項目の選定などの検討が必要である。 「知識」の定着と「学問への入り口」への興味関心の喚起の両立が課題といえる。 高等部については2024年度で全ての学年が新カリキュラムに移行することになる。新たに始まった「総合」や「探究」、「公共」をどのように関連させ体系づけていくのか検討を重ねて行く必要がある。	B	B
数学	中等部の代数分野では、3年間を通じて基礎的な計算力の定着を目指すとともに関数の考え方を理解し、高校数学の土台を作ることを目標とする。幾何・確率統計分野では、数学的な美しさを発見し、データを活用することによって問題発見、問題解決力を身につけることを目標とする。中等部では、1、2年生において、一人の教員が4時間を受け持っている。 高等部の4、5年では、全員が代数・幾何・解析・確率統計の基礎を学び、幅広い知識を身につける。6年I類では、経済学などを学ぶために必要な微積分・統計を、II類では同じ分野を理工学部・医学部・薬学部への進学を視野にいれ、より深い内容まで学ぶ。I類・II類を問わず、数学を用いて客観的に物事をとらえ、論理性をもって考えを説明できる能力を養うことを目標とする。また、データサイエンス教育の充実を図り、AI時代に活躍できる人材の育成を目指す。	2023年度も昨年度に引き続き、すべて対面での授業を展開し、授業担当者が濃厚接触者になった場合なども、教室への遠隔授業を行うなど、これまでのオンライン授業のノウハウを生かした対応ができた。 中等部生については、授業の冒頭での計算練習が定着し、授業前のよいウォーミングアップとなっている。これは、各自の理解不足や計算ミスの癖などを把握できる機会となっている。 1,2年生については、2019年度より一人の教員が4時間すべてを教えている。これにより、生徒の理解度、到達度を把握しやすくすなり、個別指導に活かせるメリットを感じている。さらには、宿題の量を適切に管理できるようになるとともに、試験の科目数を減らすことによって学習への負担の軽減につながっていると感じている。 高等部については、しっかりと時間数を確保することによって、理工系学部へ進学する者はもちろんのこと、文系学部に進む者にとっても数学的な思考を身に付け、進学後に必要とされる基礎的な数学力を備えることができていると考えている。4,5年生は初等部1,2期生が進学し、入試による入学者も併せた入学形態が異なる中で、新しい学習指導要領の下での授業展開をしており、引き続きこれまでの本校での教育レベルを維持し、より数学に興味をもつ生徒が増えるよう努力している。特に、4年生の数学Iでは、1クラス約20名ずつの少人数教育が実施4年目となり、一人一人の生徒との距離が縮まり、各自の理解度や勉強への取組み姿勢を把握しやすくなっていると感じている。 また開校以来力を入れている統計教育についても、その手応えを感じており、6年選択科目のデータ解析では、毎年コンクールに参加して、入賞者を出すという成果を上げている。さらに、文部科学省の指導要領改訂により中学校段階での統計学の内容が増えたため、5年数学IIbの記述統計学の内容の多くが中学校に移行した。このため、今年度よりデータサイエンスの内容を強化し、情報IIの内容の一部(重回帰分析・クラスター分析・決定木)を全員向けに扱うようにした。	5年数学IIbで今年度より扱うデータサイエンスの内容について、内容の精査や難易度の調整が必要である。 初等部1・2・3期生が、4・5・6年生となるが、これまでの本校での教育レベルを維持し、より数学に興味をもつ生徒が増えるよう努力していきたい。 引き続き、IT機器の利用やアクティブラーニングの試験的な導入を積極的に進めていきたい。	新学習指導要領で求められる主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の継続を推進し続けたい。そして、数学的な活動を通して数学の世界と現実の世界とを行き来させ、生徒の学習への動機付けを強固なものとするよう、カリキュラムマネジメントを行っていきたい。 政府の掲げる「数理・AI・データサイエンス」人材の育成に向けての教育改革も意識し、DX社会に活躍できる人材の育成を数学的側面から推進していきたい。	B	B

理科	基礎知識の習得に加え、観察・実験の体験を通して論理的に考える「科学的な視点」を身につけることを目標とする。 中等部では、恵まれた自然環境・設備の中で数多くの観察・実験を行っている。キャンパス内の植物の観察や7つの理科室での実験を通じて本物に触れ、自然の事象や現象についての理解を深め、法則性を見出すことを目標としている。また、横浜初等部からの受け入れを機に目標達成のさらなる向上を目指し、継続して少人数教育（1年）を試行する。 高等部では、教養としての科学と位置づけ、物理・化学・生物・地学のすべての領域の科目を必修とし、生徒の興味や進路希望に柔軟に応えられるよう、選択科目を設置している。観察・実験を通じて、自分の言葉で結果・考察をまとめてレポートを作成し、理論の理解を深めることを目標としている。また最新のトピックに触れたり、大学や卒業生と連携することで高度な内容にも取り組むことを目指している。	2023年度は、昨年度に続きすべての授業を展開することができた。また、感染防止対策の緩和により器具使用や授業形態での制限をなくしてして実施した。 今年度の実習における留意事項 ・冷房・暖房を稼働、窓と扉を常時開放して換気。 <総括> 中等部では、各学年に応じたやり方で実験や観察を多く取り入れる授業を展開し、生徒の理解を深めることができた。特に1年では少人数教育を実施し、十分な成果が得られている。授業で取り組む課題の指導をきめ細やかに行い、提出物などのフィードバックも間をおかずに行うため、生徒によって異なる理解度・習熟度をつぶさに把握できるようになった。校外学習として、1年は新江ノ島水族館、2年は日本科学未来館、3年は国立科学博物館の見学を行った。 高等部では、例年と同様に講義と実験をバランスよく実施し、基礎的な理論を理解させた上で、実験手法などの定着をはかることができた。また、「地学基礎」（2単位）は、観察・実験で得たデータを基に授業を展開するように努めた。そして、論理的思考力を育成するため、文章で答えさせる（書かせる）機会を度々設けた。その結果、多くの生徒は、論理的文章表現力が身についた。また、①北陸修学旅行に、地学の観点で事前・事後学習を取り入れ、現地での学びと合わせ一定の効果が見られた。②校外学習として、横須賀市自然・人文博物館の見学を行った。③3月の特別カリキュラムにて「地学講演会」を実施した。 感染症拡大の影響で見送っていた、唾液を用いた遺伝子検査実験を今年度より4年生で行った。 <SDGsを見据えた取り組み> 物理・化学分野： エネルギーや資源の利用に関わるものとして、脱炭素化、クリーンエネルギー、資源リサイクルなどのトピックを取り上げ、実験後の廃液処理について、その意義を理解させるなど今後のあり方を考察した。 生物・地学分野： 1年で学校周辺の自然環境調査を実施し、そのデータ分析などを通じて、地球環境の保全と利用について理解を深めた。解が何通りも存在する議題に科学的見地からどのようにアプローチしていくべきか等、問いを投げかけた。 3年では、陸域から海洋へのプラスチック流出のメカニズムやその影響について理解するため、水域のプラスチックが紫外線を受けて微細化し、マイクロプラスチックとなるメカニズムや、マイクロプラスチックが生態系や人間社会に及ぼしている影響について、具体的なデータを用いて解説・実験を行った。	中等部では、2024年度より1年生のみ週4時間（1分野・2分野）の少人数教育の実施となる。よりよい形の授業スタイルを模索しながら、高等部でのより深い学びにつながるカリキュラム作りを固めていく。一方、2年生ではこれまで続けてきた少人数教育が廃止になるが、引き続き細やかな指導ができるよう、授業スタイルおよび課題のフィードバックのよりよい方法を構築していく。 高等部では、2024年度に初等部3期生が入学することから、昨年度に引き続き初等部からの一貫教育、本校1年次より実施した少人数教育の成果がどのように現われるかを見極めたい。物化生地4領域すべての基礎科目を必修としたことで、自然科学の基礎をすべての生徒にむらなく身につけさせ、多様な進路選択を後押しできるようなカリキュラムを展開したい。 2023年度からの感染防止対策の緩和により制限を受けていた各学年での学習内容が通年通りに戻っている。 制限を受けていた学年の内容については引き続き、6年間の一貫教育の中で、過年度の不足分を補っていく必要がある。	中等部では、引き続き、初等部からの一貫教育を活かした授業展開を目指す。初等部での学びを経てきた者、帰国のため入学前に理科を学んでいない者、入試のため理科を手厚く学んできた者など、バックグラウンドの異なる多様な生徒を1つの集団に抱えて授業を展開する上で、知識量の差や、実験・観察に必要な技術習熟の差をいかに補っていくかが、大きな課題となっている。1年生については2019年度より継続している少人数教育の特性を活かして、個々人へのきめ細やかな指導を行うにあたり、より効果的な手法を模索していきたい。 高等部では、昨年度より引き続き初等部生の入学や新学習指導要領を踏まえ、新たなカリキュラムの導入や既存カリキュラムの研鑽をしていく。大半の生徒が中高6年間の理科を一貫して本校で学ぶことになっていくので、各学年で積み上げるべき基礎をより明確化し、大学進学時の到達度を高められるような教育実践をはかりたい。	A	A
音楽	中等部は基本的な力を養うことに重点をおき、指導する。基礎的な音楽理論および音楽の歴史について学習し、音楽への理解を深める。また演奏や鑑賞を通して、音楽活動をする楽しさを感じることを目的とする。 高等部では、より専門的な音楽の理解を深めるよう促す。作曲などを通して、より深く音楽理論を理解できるようにする。また打楽器やギターの演奏、西洋音楽史などを通して音楽の本質に触れることを目的とする。	今年度はコロナウイルス感染症が5類に移行したことから、マスクを外して歌唱の授業をおこなうことができた。マスクを外すことにより、口の開け方や口の形についての指導などができ、歌唱指導に関してはより深い指導を行うことができた。しかし、例年行っている歌唱・リコーダーの実技はまだ実施することができず、打楽器、ギターのアンプサンプルの活動を行った。 歌唱の分野では、中学では合唱コンクールを行うことができた。高校ではイタリア歌曲のレッスンや声楽のアンプサンプル、合唱を行うことができた。体をしっかり使って声を出すことや、合唱の基礎的な指導に時間をかけて指導した。歌唱を通じて、音楽をする楽しさや、喜びを感じることができた生徒は多く、一定の成果が見られた。 しかし、器楽の分野では、例年行っている歌唱・リコーダーの実技はまだ実施することができず、打楽器のアンプサンプル等の活動を行った。クラスメイトと息を合わせて合奏する喜びを味わうことができた。	来年度は、リコーダーを使った授業ができる予定である。コロナ感染予防のために、音階を伴う楽器をしばらく扱っていないかったため、音程感覚を身につけることを意識して授業を行う必要がある。 音階のしくみについてもしっかり理解して演奏ができるよう指導する。	音楽理論や音楽史などがより深い表現活動を行うために必要なことであるということを理解して、学ぶ姿勢を作る必要がある。音楽理論の学習が実技に生かされると実感できるような授業を工夫する。 表現・理論・鑑賞の各領域のバランスの取れた編成を考える必要がある。	B	B

美術	身近な物や風景をモチーフとし、絵画や塑像の基本的な制作技術、またそれに伴う観察力の成長を促す。また与えられたテーマから自由に発想し、そのイメージを作品として成立させる能力を養う。 中等部段階では経験のある素材を使用し、基礎力の向上と表現の幅を広げる。 高等部では専門的な素材を使用し美術の知識を深めながら作品の成立を目指す。年代に応じて技術や素材を発展させ幅広い経験を得ながら、豊かなイメージ力と再現能力を養う。	中等部は、ほぼ例年通りの課題をこなした。自画像等の事業が復活した。 高等部は、ほぼ例年通りの課題をこなした。 <table><tr><td>1年（6クラス）</td><td>1期 塑像（手）</td><td>2期前半 版画（顔）</td><td>2期後半・3期 水彩（風景）</td></tr><tr><td>2年（6クラス）</td><td>1期 スクラッチ</td><td>2期平面構成</td><td>3期素描（靴）</td></tr><tr><td>3年（6クラス）</td><td>1期 模写</td><td>2期 静物画</td><td>3期 塑像（顔）</td></tr><tr><td>4年（3クラス）</td><td>1期 油彩</td><td>2期 陶芸</td><td>3期 石膏デッサン</td></tr><tr><td>4年（3クラス）</td><td>1期 陶芸</td><td>2期 油彩</td><td>3期 石膏デッサン</td></tr><tr><td>5年（3クラス）</td><td>1期 シルクスクリーン</td><td>2期 陶芸</td><td>3期 細密描写</td></tr><tr><td>5年（3クラス）</td><td>1期 陶芸</td><td>2期 シルクスクリーン</td><td>3期 細密描写</td></tr><tr><td>6年</td><td>選択授業 陶芸 古典技法</td><td></td><td></td></tr></table> 陶芸では毎年大量の削りカスや失敗した粘土が出るが、本校は大型の鑿岩機1台、大型ドレン機2台を有しており、ほぼ100パーセントの再利用ができています。 また、これらの粘土の再生を授業内で生徒にも参加させることにより資源の再利用の大切さも学んでいる。	1年（6クラス）	1期 塑像（手）	2期前半 版画（顔）	2期後半・3期 水彩（風景）	2年（6クラス）	1期 スクラッチ	2期平面構成	3期素描（靴）	3年（6クラス）	1期 模写	2期 静物画	3期 塑像（顔）	4年（3クラス）	1期 油彩	2期 陶芸	3期 石膏デッサン	4年（3クラス）	1期 陶芸	2期 油彩	3期 石膏デッサン	5年（3クラス）	1期 シルクスクリーン	2期 陶芸	3期 細密描写	5年（3クラス）	1期 陶芸	2期 シルクスクリーン	3期 細密描写	6年	選択授業 陶芸 古典技法			3教室に全ての道具を設置する予定だったが、収納場所に限界があり実現できなかった。	3教室をフレキシブルに活用する為、道具を各教室に配置できるよう設置場所を工夫する。 道具はどの教室にも移動可能にした。	B	B
1年（6クラス）	1期 塑像（手）	2期前半 版画（顔）	2期後半・3期 水彩（風景）																																			
2年（6クラス）	1期 スクラッチ	2期平面構成	3期素描（靴）																																			
3年（6クラス）	1期 模写	2期 静物画	3期 塑像（顔）																																			
4年（3クラス）	1期 油彩	2期 陶芸	3期 石膏デッサン																																			
4年（3クラス）	1期 陶芸	2期 油彩	3期 石膏デッサン																																			
5年（3クラス）	1期 シルクスクリーン	2期 陶芸	3期 細密描写																																			
5年（3クラス）	1期 陶芸	2期 シルクスクリーン	3期 細密描写																																			
6年	選択授業 陶芸 古典技法																																					
体育	体を動かす喜びを体験させ、生涯にわたって運動に親しみ取り組むきっかけとし、社会生活を営む為の基礎作りを目指す。 基礎体力の強化に加え、体のバランスや調整力を養う運動も取り入れる。 安全に対する知識・行動・判断力をつけ、周囲への配慮もできるよう、道徳教育的側面も意識しながら集団の中での態度、姿勢についても指導し、バランスのとれた教養人育成に教科として貢献する。	今年度も全ての授業を対面で展開することが出来た。引き続き、中高共に安全面、インフルエンザ・コロナ感染予防対策を最優先に、さらに6・7・9月は熱中症対策を考慮しながら授業を実施。また4年ぶりに全学年で水泳授業を展開することが出来た。運動を楽しむために必要な基礎技術習得を意識し、生徒の低下した体力回復・向上にも重点を置き、また今年は最終段階でゲーム形式の授業も展開することが出来た。 5年体育実技 ○今年度から週2時間に変更された。週1回の運動は、技術の定着が難しく、基礎体力の持続に留まった。しかしながら、5年生ということもあり、授業内容の理解が早く、円滑に進めることができた。 4年保健 ○現代社会と健康（健康の考え方と成り立ち、運動と健康、食事と健康、休養・睡眠と健康、喫煙と健康、飲酒と健康、薬物乱用と健康、精神疾患の特徴、精神疾患からの回復、健康に関する意思決定・行動選択、健康に関する環境づくり） ○安全な社会生活（事故の現状と発生要因、安全な社会の形成、交通における安全） 5年保健 今年度より現役の医師に5年全クラスの授業を行い、健康を保つことの大切さ、生涯を通じて重要な土台となることを、より深く、さらに自分のこととして捉えられるよう授業を展開することが出来た。 ○現代社会と健康：私たちの健康のすがた、生活習慣病の予防と回復、がんの原因と予防、がんの治療と回復、精神疾患の予防、現代の感染症、感染症の予防、性感染症・エイズとその予防 ○生涯を通じる健康：ライフステージと健康、思春期と健康、生意識と性行動の選択、妊娠・出産と健康、避妊法と人工妊娠中絶、結婚生活と健康、中高年期と健康、働くことと健康、労働災害と健康、健康的な職業生活 ○健康を支える環境づくり：大気汚染と健康、水質汚濁・土壌汚染と健康、環境と健康にかかわる対策、ごみの処理	安全性を確保し、感染予防対策を継続しながらも、教育効果の高い授業内容を検討し、それらを主体的に実践出来る生徒育成が課題である。	引き続き減単となった5年生の実技についてはどのように授業を展開していくべきか検討していきたい。 さらに、運動における競争や協働を通じて、互いに協力し、公正に取り組む姿勢を養って行きたい。	B	B																																
技術	実践的・体験的な学習を通じ、知識と技術を習得させ、生活する能力と実践的な態度を育てる。1年生では、情報に関する内容、2年生では、加工分野のうち製図・木材加工を、3年生では、エネルギー変換の分野で電気について、加工分野では金属などを扱っていく。	1年 1学期 パソコン入門 2学期 情報モラル、プログラミング入門 3学期 プログラミングでクイズを作ろう 2年 1学期 製図学習 2学期 木材の加工・木材の加工2 3学期 栽培学習（豆苗の育成方法） 3年 電気分野（エコキューブラジオの製作） 1学期 夏休み 機械学習（からくりおもちゃの製作） 2学期 金属の加工（金属板の加工、オリジナルキーホルダーの製作） 3学期 金属の加工（鋳造）	長年使用してきた工具の点検、入れ替えが課題である。	作品保管場所の確保に苦勞していて、取り組むことが出来る教材に制限が出ている。今後改善されると、より幅広い学習内容に取り組めるので、検討していきたい。	A	A																																

家庭	中等部では生活に関わる基本的な知識・技術の習得をめざす。栄養や衣服の素材、管理のしかた、子供の成長と発達、住環境の整え方などについて学び、調理実習や被服製作実習など実践的な実習を行う。 高等部ではさらに資源やエネルギーの効率的な利用について考え、持続可能性を意識した生活ができることをめざす。また、子供や高齢者など様々な世代の人々についての理解を深めることを目指し、妊婦体験実習や高齢者疑似体験実習などを行う。学んだことを実生活へ生かせるように考えさせるグループワークを行う。	今年度はコロナ前とほぼ同様に実習などを実施できた。2年生の被服製作実習はTT(チーム・ティーチング)の効果により、理解度と完成度が高く、生徒の取り組みも熱心であった。ただし今年度は実習期間のみのTTとなってしまう、今後の課題となっている。生徒のためにも最低限、実習の安全と実技指導だけはTTでできるように人員を確保したい。 家庭科では従来からSDGsを意識した教育を行ってきた。1、4年生では食品ロスやゴミ問題などを食生活分野と併せて積極的に扱っており、ゴール2、6、7、9、10、11、12、13、14、15、17に根ざした教育を行った。3、5年生では消費生活を取り扱うことにより、特にゴール12のつくる責任・つかう責任について考え、また、5年生のおもちゃ製作実習は家庭にある不要品を用いることにより、持続可能な社会作りに直結する総合的な取り組みとなっていた。高等部の授業ではジェンダーや働き方、格差や経済についてもグローバルな視点で扱い、ゴール1、2、3、4、5、6、8、9、10、12、16、17に根ざした教育を行った。5、6年生では、妊婦体験実習・高齢者疑似体験実習により、他者への関心や理解、思いやりを育み、パートナーシップを身につけ、よりよい社会の構築に役立つ人材作りに貢献している。6年生では住生活分野で、住み続けられるまちづくりについて考えさせる内容に加えて、今後起こりうる災害とその対策についてグループワークを中心として学習し、災害について実践的に考え、対策をしていくための態度を身につけさせた。 これまでに施設面の改善もだいたい進めることができた。今後は調理室の食器棚の改修もし、安全かつ機能的に実習ができるようにしたい。	コロナ対応は緩和され、ほぼ通常に戻ったが、引き続き、用具の消毒、作業や試食時の注意を徹底していく。 調理実習でアレルギーを発症するケースがあった。事前に確認しているが、誤って皮膚についたり、自己判断で勝手に口にしたりということが1年生では起こるため、1年生の調理実習では補助教員が必要である。 被服製作実習でのTTを継続させていきたい。 被服室前の掲示板が書道用に利用されているが、家庭科の実習授業中に掲示作業が行われることがあり配慮が必要である。書道作品用の掲示板を別の場所に設けたうえで、ビニールカバーを外して被服室用に利用させていただきたい。	被服室が新設され、授業が行いやすくなった面もあるが、実習をするには狭く、アイロン作業は廊下で行わざるを得ないのが悩みである。また、雨の日は窓が開けられず換気が悪くなるため、改善が必要である。次は調理室も食器棚を改修し、安全に効果的な授業が実施できるようにしたい。 被服製作実習のTTは申請が通らなかった。TTの効果は絶大なので実施できる道を探りたい。実習期間だけは、特に安全性の確保と実技指導のためになんとしても必要である。 調理実習の食材調達の負担が大きく、ここ数年苦慮している。購入や支払いについては監理室や事務室の負担も大きいが、協力してくれる近くのスーパーを利用して、なんとかしていくしかない。	A	A
情報	中等部では、基本的なコンピュータの使い方(タイピング、文書作成、表計算、プレゼンテーションの資料作成)やクラウドを利用した課題確認・提出作業、プレゼンテーションなどを通して、発表のスキルを身に付けさせる。時間的余裕があれば、アンケート調査や世間のデータを用いて、分析を行う。また、プログラミング教材キット(SPIKE プライム)を利用したプログラミングを通して、センサの仕組みや身の回りにあるプログラムによって制御されているものに興味を持たせた後、言語によるプログラミングにも取り組む。プログラミング体験時には、フローチャートを書くことで、順序・手順を考えながら作業を行う大切さを理解させる。 高等部では、各自が企画から撮影、編集まで実施するCM制作や、企画から、文章作成、写真撮影、編集、校正まで実施する雑誌記事制作を通して、物事を表現する手法の幅を広げるとともに、物事を発信する力、人に伝えるものの作成方法を身につけさせる。さらに時間的余裕があれば、「学問のすすめ×AI」をテーマにAIに触れさせる。また、プログラミング作業を通じて、論理的思考を養い、そして情報のデジタル化、情報デザイン、知的財産、著作権、個人情報、ビッグデータなどをキーワードとしながら、情報化が社会に及ぼす影響について理解を深める。 情報モラルについては、中等部・高等部ともに状況や年齢に合わせて定期的に呼びかけ、考える機会を設ける。 クラウドの利用に関しては、中等部・高等部ともに積極的に利用する。	中等部2年生全員が2週に1回のペースで取り組んでいる5分間文書入力サンプル文章に、SDGsの「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を取り上げ、17の目標を読む機会を設けた。 「目標と具体案」に記載した教科の授業を通して身に付けさせたい事柄については、概ね学年に応じたスキル知識が身についていると感じている。クラウド環境の利用や授業で得た知識を、他教科、委員会活動、クラブ活動、学級活動等で生徒たちが、積極的に上手に利用することができていた。	入学してくる生徒の実態に合わせたカリキュラムを考えながら授業を行っていきたい。	発展し続けている情報技術・情報社会の実情、入学してくる生徒たちのICT活用スキルの実態に合わせて、内容を常に変えていく必要がある。 校内でICT機器活用する環境(場所・施設・机・椅子など)にも目を向け、生徒がICT機器を用いやすい環境整備も行っていきたい。また、すでに導入済みの3Dプリンタや、今後導入予定のレーザーカッターなどデジタルファブリケーションの環境整備にも取り組みたい。	A	A

英語 (α)	Our overall aim is to graduate knowledgeable, responsible, confident and globally-minded communicators who are motivated to continue their English-learning journeys and to make a meaningful contribution to society. Specific aims for Writing and Grammar: Students will become proficient writers of both academic and creative essays, culminating in a 2000-word research paper written in the 6th Year. Particular attention will be paid to academic writing conventions such as citations, referencing and the need to avoid plagiarism. Specific aims for Reading and Vocabulary: Students will improve their vocabulary knowledge and refine their reading skills by studying a variety of novels and non-fiction works typically read by students of the same age in English-speaking countries. Sixth year students will study Shakespeare. Specific aims for Speaking and Listening: Students will become confident English speakers. They will be able to make professional presentations and participate in debates on increasingly complex subjects. Sixth year students will participate in the Model United Nations, deepening their understanding of international issues.	ICT skills acquired by both teachers and students during the Covid-19 pandemic continue to be utilized in many English courses. Some examples include: 1) Sending messages and setting tasks for individual students who have had to stay at home due to Covid-19 2) Asking students to upload recordings of speeches done at home during longer holiday periods 3) Using Google Docs to facilitate the editing and redrafting of essays Content and Language Integrated Learning (CLIL) has always been a characteristic of the Alpha English curriculum at SFC, and as one of our central aims is to graduate globally-minded, responsible students, there has always been a focus on studying global issues in a way that encourages our students to think critically about the issues that they will face as members of Society 5.0. In recent years, the SDGs have proved to be a useful framework for this purpose, and the following are examples of work done by Alpha students that focuses on the SDGs: 1) Year 1 SLWG. Speech topics focused on Goal 3 (Good Health and Well-Being), 4 (Quality of Education) and 13 (Climate Action). In addition, several TED Talks that focused on topics related to the SDGs were studied, e.g. the talk by UN Patron of the Oceans, Lewis Pugh, which focused on Goal 14 (Life Below Water). 2) Year 3 RV. Goals 16 (Peace, Justice and Strong Institutions), 5 (Gender Equality) 4 (Quality of Education) and 8 (Decent Work & Economic Growth) were addressed in the study of the novel <i>To Kill a Mockingbird</i> by Harper Lee. 3)Year 3 Alpha WG. Students write an Informative Essay focused on SDGs. 4) Year 4 SL. Students gave persuasive speeches in which they had to choose a problem that fell under the SDGs, propose a solution, and persuade their audience to take action on it. 5) Year 4 RV. Goals 16 (Peace Justice and Strong Institutions) were frequently discussed during our study of <i>Fahrenheit 451</i> by Ray Bradbury. 6) Year 6 MUN. Students play the role of UN ambassadors for the duration of the course. The SDGs are studied in detail, and students make presentations focusing on which of the Goals are most relevant to the countries they are representing. We also discuss the SDGs in the context of Japan, and students are asked to write short essays in which they discuss which Goals they feel Japan is doing well and not so well on. Finally, the course concludes with an in-school conference in which all members of Year 6 Alpha work together to write a mock UN resolution on a global topic of concern. This year the topic was <i>Universal Secondary Education for All</i>, and Goal 4 (Quality of Education) was a major focus of the day. 7) Year 6 Discussion and Debate elective class. Each debate is based on a theme, many of which are directly linked to the SDGs, with debaters often making reference to the SDGs in order to strengthen their arguments. Some examples include: Goal 1 (No Poverty) <i>THBT the government should give more medical and financial support to the elderly.</i> Goal 5 (Gender Equality) <i>THW make companies hire as many women as men.</i> Goal 7 (Affordable and Clean Energy) <i>THBT all cars should be changed to electric cars.</i> 8) Year 6 Beta RV. Students read 1984 by George Orwell and discussed dystopia and the future society, which is linked to Goal 16 (Peace, Justice, Strong Institutions) 9) Year 6 iRui Beta LS. Students make presentations based about Ethical Choices relating to SDGs. As we find every year, the majority of graduating Alpha students have reached the desired level of English. This is confirmed by the results of external exams such as TOEFL and contests such as the Keio Academic Writing Contest and a variety of speech contests. In recent years, a growing number of students are enrolling in the PEARL, Double Degree and GIGA programs at Keio University, enabling them to further develop their foreign language skills.	The Alpha curriculum is under continuous review and we are constantly looking for new materials to enrich the learning experience of our students. Particular areas of focus for 2024-25 will be: a) To focus on grammatical accuracy in the written work of the weaker Alpha students. b) To ensure that we continue to make the best use of ICT and online learning platforms to complement what takes place in school, whilst being aware of the challenges posed by technology "assisting" students with homework. c) To further raise awareness of the real-world issues that our students will face in the future.	The arrival of the first cohort of Keio Yokohama Shotobu students in 2019 brought with it a number of challenges and opportunities for the English department. We now feel we have successfully implemented a challenging and coherent curriculum at the junior high level that addresses the needs of our highly diverse student intake. The first cohort of Shotobu students moved up to senior high school in April 2022, so our medium-term aim is to ensure that an equally challenging and coherent curriculum is developed to suit their needs. To this end, Year 4 WG students completed a course survey in March 2023, the results of which confirmed that the course content follows on well from junior high school courses and addresses student needs well. The development of AI presents a number of challenges for English education. Students will be strongly dissuaded from using AI and translation applications for most in-class and homework tasks. However, it is acknowledged that AI will increasingly become part of students' lives, and ways to constructively incorporate the technology into the English curriculum will be explored.	A	A

英語 (β , γ)	中等部、高等部共に英語はコミュニケーションの道具であるという基本理念に基づき、英語での情報を理解する Receptive な言語能力と、また英語で自分の考えを発信していく Productive な言語能力をバランス良く育て、英語を実践的に使うことができる人を育てることを目標としている。6年修了時に英検準Ⅰ級、CEFR B1 レベルの言語運用能力に到達することを目指す。	コロナ禍でのオンライン授業、続くオンラインと対面のハイブリット授業を経て、今年度は完全に対面授業に戻った。Google Classroom は課題の配信や提出のツールとして継続利用している。	コロナ禍の2年間で、対面授業とオンライン授業のハイブリッドに新しい学習の可能性を見出したが、今後もポストコロナの学び方として研究していく必要がある。	家庭学習時間が不足している生徒への課題の出し方、予習復習の仕方、self-study habit をつけさせる工夫が必要だと思われる。		
	中等部では、3年間で文科省が定める文法事項に加えて、副教材である New Treasure で扱われている発展的な文法事項の学習も進め、さらに、学習した文法事項を発展的に用いた様々な実用的表現、基本的な語彙を身につけることを目標とする。3年次には偉人に関するグループプロジェクトや、身近な話題に関するプレゼンテーションを経験する。	高等部ではより多様な状況における日常会話での英語、及びよりフォーマルでアカデミックな英語に触れ、Listening や Reading 能力の向上させることができた。また同時に Listening や Reading のタスクを通して得た情報に基づいて、数多くのテーマについてプレゼンテーションを行った。	日々の授業に関しては、日本人の教員と Native の教員が引き続き密に連携を取り、必要に応じてお互いに授業内容を補い合って、学習内容の更なる定着を図っていく必要がある。	副教材として使用している New Treasure シリーズを、1～4年で、より効果的に教材を活用する方法を引き続き考えていく必要がある。		
	中等部入学時の多岐に渡る学習歴及び習熟度に応じてより効果的な授業を行うために、1年、2年では2クラス合同4分割(α1クラス、β2クラス、γ1クラス)の授業展開とする。3年では2クラス合同3分割(α1クラス、β2クラス)の授業展開とする。 高等部では英語で情報を発信していくことにさらに重点を置き、4年で Speech、5年で Speech、6年で Discussion や Presentation を実施している。英語のニュースを教材として扱うことで、できるだけ実践的な英語力を高められるように工夫している。英語で情報を読み取り、それらを土台として自分の意見を書いていく Academic Writing の能力を高める取り組みも行っている。	Reading の授業では、教科書のみならず、関連トピックの新聞記事や映像教材を使用し、一般的な教科書には出てこないような実用的な英語表現に触れたり、語彙力を強化し、社会問題に関する意識づけをすることができた。また、5, 6年で行われる Academic Writing では、英語で他者の意見の要約を書く力や、他者の意見を取り入れながら、自分の意見を説得力ある形で表現していく力を養うことができた。 SDGs を見据えた取り組みとしては、そもそも教科書の題材に SDGs に関するものが多く、生徒は常に SDGs を意識して英語学習を進めていると言える。 英検や TOEFL などの資格・運用能力試験に特化した授業を行っているわけではないが、今年度5年生で Writing では英検準Ⅰ級の Essay フォーマットを授業で扱う試みをした。ここ数年は、βの生徒も卒業時まで準Ⅰ級を取得する生徒の割合は30%を超えるまでになっている。	中等部3年でのβ、γの合流に関しては、大半の生徒にとっては特に問題が生じないことがわかったが、成績下位者に対するフォローアップの方法とタイミングを考えていく必要がある。また、高等部の授業に準備するためにも、「中学3年間の総まとめ」と「Self-study habit」を意識して指導していく。 高等部では既習の語彙、文法事項を使って Speech、Debate、Discussion、Presentation、Academic writing などを行い、自分の意見を発信していく能力を高めることももちろん大切だが、意味を優先するあまりに生じる文法的誤りを、見過ごしたままにせず、文法的正確さを高めていくための取り組みを、本格的に行うこともまた重要である。前述の通り「英語はコミュニケーションの手段である」という基本理念に基づくが、「通じればいい」ではなく、大学、社会人になった時に高いレベルでのコミュニケーション能力を求められる本校生徒には、正確さ、より知的な英語運用能力を鍛えていきたい。 ICT やオンライン学習プラットフォームは今後も活用していく。しかし、昨年より生徒が課題作成時にテクノロジーに依存する傾向が見え始めた。将来そうしたテクノロジーを有効に活用できるようになるためにも、中等教育段階での学習は、「ツールに頼って出来のよいものを作成する」ことがゴールではなく、「自分の頭で考え、間違いをしながら、言語運用能力を高めていく」ことを教える側と学ぶ側の共通認識として授業を展開していく。	高等部の生徒については、ITP-TOEFL を毎年実施しているが、国際基準の英語能力テストである iBT TOEFL は、試験内容が ITP-TOEFL とは大きく異なっている。将来的には iBT TOEFL が要求する統合的言語スキルをさらに高めることができるように、高等部の英語カリキュラムを再構築していくことが求められる。 New Treasure を使い始めて4年目という節目を迎えたので、中等部各学年の Can-do リストを作成し、SFC 独自の新たなカリキュラムと評価基準を打ち出す必要がある。	A	A

2023 年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

2. 各委員会における自己評価

評価方法	当該年度の始業までに、運営計画と、3～5項目の目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に計画の実施状況と、各目標項目の達成度について各委員会の構成教員が、A～D の4段階で評価する。
総合評価 規定	目標項目における評価点の平均点を算出し、以下の基準でアルファベット表記をする。 A 達成できた（80%～100%）／B ある程度達成できた（60%～79%）／C あまり達成できなかった（40%～59%）／D 達成できなかった（～39%）

委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
生徒係	1. 気品の泉源・知徳の模範となる塾生の育成 2. 自宅外通学者の生活指導 3. 防災意識の向上・災害時に生徒自身が的確に対応できる知識の習得・交通安全意識の向上 4. 防犯意識の向上・情報機器・スマートフォンの適切な活用法の習得 5. 生徒の成長に合わせた保健講演会の実施 6. 生徒の学校生活全般にわたる支援	1. 生徒の公共交通機関利用時のマナー・規範意識の向上させる。 2. 一人暮らしの会の実施し、各寮との連携をはかる。 3. 防災訓練を実施（帰宅方面別の設定／地震火災を想定した訓練）する。 4. 道徳・HRの時間を利用し、防犯教育や学年に応じたスマートフォン利用の仕方を徹底させる。 5. 保健講演会を実施（精神保健・スポーツ障害など）する。 6. 私物管理の徹底をはかる。	1. 教員が年間複数回、湘南台駅および大学本館前にてバス乗車指導に取り組んだ。湘南台の4番バス停から乗らない1・2年生がいるように思われる。乗車列に関する苦情はほとんどないが、乗車マナーおよび湘南台駅で広がって歩くことに対する苦情は多く寄せられている。 2. 生活上の具体的な問題点や解決法などを上級生から下級生に情報提供する場を設けることができた。 3. 方面別帰宅グループの確認および地震発生を想定した訓練を行った。 4. 自転車通学者に対する交通ルールの遵守およびヘルメット着用について周知した。 5. 校医・カウンセラーなどによる講演会を複数回実施した。 6. 落とし物の展示を学期に1回のペースで実施した。	1. 乗車マナー、待機時のマナーを周知し、円滑なバス通学になるよう検討を続ける。 2. 寮・学校間の連携を密にし、寮からの情報を生徒係・担任団と共有する。次年度も一人暮らしの会を実施する。 3. 次年度も帰宅方面別グループ分け、災害時を想定した避難訓練を実施する。 4. 財布・スマートフォン等の貴重品のロッカー管理を徹底していく。 5. 次年度も様々な形での講演会を検討したい。 6. 生徒会と連携し、持ち主が現れなかった落とし物の処理方法を検討していく。 7. 不審者情報や落とし物の情報について Google classroom 等を通じて生徒たちに周知する方法を検討していく。	1. 生徒がキャンパスと駅の間を快適に通学できるような輸送システムを確立する。 2. 生徒の精神衛生面における支援のため、学校と家庭がより連携し生徒を見守る体制づくりを模索する。	B	B
いじめ 防止対策 推進室	1. いじめの未然防止のための措置を講じる 2. いじめの早期発見のための措置を講じる 3. いじめの早期解決のための措置を講じる	1. 学校生活、友人関係にまつわる悩みなどのカウンセリング件数の増加に伴い、カウンセラーの相談時間枠の増加に加え、ステイホーム中から現在においても、電話や web 会議システムを用いた遠隔カウンセリングなどを通じて、防止のための対策を実施する。 2. 学級活動、生徒会活動、道徳の授業やクラブ活動の場において、いじめについて生徒が主体的に考え行動する機会を設けるように努め、道徳性を育む取り組みを進める。 3. 教職員は日常的にいじめの問題に触れ「いじめは絶対に許されない行為である」という雰囲気を醸成するように努めるとともに、「いじめはどの学校でも、どの生徒にも起こりうる問題である」という認識の下、生徒の行動に目を配るとともに、生徒との信頼関係の構築に努める。また、個人面談を実施するなど、生徒がいじめを訴えやすい体制を整える。 4. 表面化しにくいインターネット上のいじめへの対応策として、情報モラルを身に付けさせる指導を継続的に行うと共に、保護者と緊密に連携・協力し、双方で指導を行う。	1. 今年度内に重大な事案は発生しなかったが、いじめを疑わせる事案は散見された。引き続き最大限の防止策を講じるとともに、いじめの兆候を早期にキャッチできるよう努めていく。 2. いじめ発生時の対応フローを全教員に対して講習会を行い、周知した。 3. いじめに関するアンケートを全生徒に対して実施した。	中高併せて 36 クラスと学校規模は大きいが、一人一人の生徒の様子を丁寧に観察する姿勢を堅持するとともに、いじめ事案が発生しなかったことに安心感を抱くことなく、緊張感を持続していくよう、教員集団に促していく。	いじめの形態は社会背景に影響を受けて変化することから、教職員が継続的に研修を行なう制度作りが求められる。また、教職員のコミュニケーションをより緊密にとれる体制を整えていく必要があると考えている。	A	A

		5. 生徒がいじめを受けていると思われるときは、直ちに本推進室の会議を緊急開催して情報を共有するとともに対策を講じることにする。いじめを受けた生徒を守り、安心・安全な学校生活を送ることができるよう必要な支援を行う。 いじめを受けた側、行なった側双方の生徒および保護者に対し、事実関係を速やかに伝え、適切な対応が行えるよう、保護者の協力を求めると共に、継続的な支援を行う。 6. 一貫教育校いじめ問題連絡会に出席し、塾内一貫校との情報交換・意見交換を通じ、いじめの問題に対して、適切および迅速に取り組む体制を整える。					
文化祭	1. 文化祭の運営、管理をはじめ、規則の取り決め、出展企画の活動の統括を行う 2. クラブ、クラス、有志、教員による各出展企画の、調整および支援を行う 3. 文化祭作業および文化祭を通じ、生徒の文化活動の活性化と学内交流の深まりを目指す 4. 生徒、教員からなる企画を行うことで、本校の校風、活動状況を内外へ紹介する 5. 「文化の薫り」を基盤とした統一性のあるものを創り上げ、本校生徒や来場者に我が校の「薫り」を感じてもらうことを目指す 6. 安全と省資源、節電、ゴミの減量に対する配慮を心がける	1. 2023 年度は、学校開催を想定して準備を開始する。オンラインを活用した文化祭における経験やシステムの活用を検討し文化祭の充実と効率化を図る。 2. 感染症の状況に応じ対策を取る。 ・入場者数の調整、教室内等の換気を行う。必要に応じ対人距離やマスクの着用や消毒などの対策を昂じる。ステージ企画には、公演形態・公演時間・観客人数等について、感染防止を目的とした工夫を促す。 3. 過去の文化祭の記録写真を閲覧できるようにし、企画立案時の発想サポート、校舎使用上の技術継承を目指す。 4. 生徒の文化活動を活性化すべく、アカデミックな活動を行う有志企画の出展を補佐する。 5. 文化祭担当教員と実行委員生徒は綿密な連携をとり、担当教員はこれまでの実行委員会のノウハウの伝達を、生徒はより活性化および合理化したシステムの構築を行う。 6. 文化祭ウェブサイトと SNS を活用し告知を行う。	1. 2023 年度は、校舎を会場とした文化祭を開催した。全学年全クラス・文連クラブ・複数の教員企画・有志企画が出展した。 2. 来場者数 11/11（土）来場者数：2,857 名 11/13（日）来場者数：3,153 名 入場者総数：6,010 名 3. 感染症対策 ・感染症の流行が見られなかったため、対策を大幅に緩和しての実施となった。文化祭後、校内での感染拡大も見られなかった。 ・校舎内の混雑緩和のため事前申込み制とした。来場者数が事前に把握出来たため、それに応じた対策への準備が出来た。また来場者にはマスクの着用、消毒の協力を呼びかけた。 ・教室内の企画は換気を徹底し窓・ドアの常時開放を徹底した。また在室人数を 40 名として、スタッフルームの設置も禁止とした。マスクなどの着用は状況に応じて呼びかけを行った。 ・ステージ公演は人数制限を設けなかったが、対策として各公演の間に換気を行った。 ・校内での飲食は基本的に禁止とした。生徒の食事会場として文化祭当日は大学の大教室を利用した。また来場者には例年設営していた第 1 体育館の飲食スペースは設けず、大学食堂をイートインスペースとした。	1. コロナ以前の文化祭の形態に戻すことを目標としながら、新たな文化祭の形を模索する。 2. 企画内容の多様化を図るため、より具体的なアドバイスが出来るよう心がける。 3. 企画に関わるメディアや表現媒体の再検討を行う。 4. これまでの経験を引き継いでいくことを重点事項としながら、企画等の内容充実を図るため適切な助言をしていく。 5. 本校文化祭が生徒のより一層の文化活動活性化を推進することを目指す。 6. ゴミの分別の徹底と削減を目指す。	1. 本校文化祭の目標を達成すべく、状況に応じた文化祭形態を考案する。 2. 文化祭が、全校生徒の持つ創造力・表現力の素地へと働きかける機会となることを目標に、実行委員会の活動を補佐する。	B	B

			4. 企画について ・例年通り、15分以内に収まる企画とした。 ・劇企画は教室と混雑緩和の対策として150番教室を利用し実施した。 ・ステージ公演は席数を大幅に増設した。事前申込みによる指定席制とした。 5. 文化祭 Web ページについて ・文化祭の告知として web および SNS を利用し、各企画の簡単な紹介および準備期間の写真を配信した。公開期間は web・SNS 共に、2023 年 11 月 30 日までとした。 6. 文化祭の継承について ・実行委員会では、2019 年度以前に遡り、資料整理および更新を行った。Google ドライブ等を積極的に用い、実行委員間、および生徒と文化祭担当教員間の協同作業を行った。 ・図書室で過去の文化祭の記録写真およびパンフレットを自由閲覧できるようにしたことで、企画立案時の発想サポート、校舎使用上の技術継承が可能となった。 ・実行委員会からの各企画への助言には、過去の文化祭で見られた技術も積極的に盛り込んだ。担任や企画顧問も、継承と革新の両方を目指した助言を行った。結果、過去の技術を上手に取り込んだ企画が多く生まれた。 ・文化祭担当教員はこれまでの実行委員会のノウハウの伝達を、実行委員生徒はより活性化および合理化したシステムの構築を行うことができた。				
教務	1. 授業や試験、学期末の特別日程などが円滑に行われるように事務処理を行う 2. カリキュラムに基づき、教科選択が適正に行われるように環境・手続きを整備し、実施する 3. 生徒の出欠席の状況を管理する	1. 授業や試験の時間割・使用教室一覧などを作成する。 2. 次年度の 5 年生第二外国語の希望調査を行なう。 3. 次年度の 6 年生選択科目・第 2 外国語の調査を行う。 4. コンピュータ委員会と連携して、電子出席簿の運用を行う。 5. 教室の予約表や備品の管理を行なう。 6. コロナ対応でバスの過密を避けた乗車のため、始業時刻は 8:45 を継続する。	1. 6 年生 HR が西校舎に移ってから初めての年度を終えた。教室稼働率が高い状態は変わらないが、多目的教室が既存棟の 1 階でほぼ揃ったので、生徒にとっては分かりやすい配置となった。 2. 第 2 外国語は 9 月予備調査、1 月本調査を実施した。 3. 雨天等でのバス遅延が多く、相変わらず生徒の登校時の負担が多い。 4. 教室の Web 予約システムは順調に稼働している。	1. 南校舎を 4 年生が使い始めたが、机と椅子は相変わらず既存棟から持ち出したままである。体格に合ったものへの交換が望まれる。 2. 4 年生に対しての第 2 外国語のガイダンスが手薄である。希望調査の前に、説明会の企画が課題である。 3. バスの遅延情報が開示されるタイミングが、出欠集計に間に合わないことが多く、集計の締切日に余裕を持たせたい。	新カリキュラム（5 年生からの第 2 外国語履修）が 3 年目で定着した。教室利用や試験実施、時間割作成などが円滑に運用できるように継続して努める。	B	A

コンピュータ	1. 教員と生徒が利用するコンピュータ、タブレットとその周辺機器の管理及び整備 2. ネットワーク機器の管理及び整備 3. プロジェクタなどの映像機器の整備及び管理 4. BYAD(中等部)の実施と次年度の機種選定、BYOD(高等部)の実施と次年度のスペック検討	1. 授業や校務のオンライン化に必要なサービスを選定、契約するとともに、その利用方法を教員・生徒に周知する。 2. 教員用、生徒用パソコンのリプレイスに伴い、機種選定し、スケジュール通りに導入、置き換え作業を行い、9月以降の授業で利用開始できるようにする。 3. 情報セキュリティに関わる最新情報を常に収集し、必要に応じて、技術的な対策を講じる。	1. 世界的な半導体不足が概ね解消し、スケジュール通りのリプレイスを実施できた。 2. 例年通り、ネットワークを安定して運用できた。在宅勤務や在宅学習の基盤として、ネットワークを活用できた。 3. セキュリティ上の重大インシデントを発生させることがなかった。 4. BYADの授業内設定支援をし、BYAD、BYODの授業中利用を促進させることができた。	物価上昇に伴い、情報機器の価格や、委託業者の人件費も上昇している。必要な情報機器の絞り込み、BYAD・BYOD利用のさらなる促進や、委託業者の業務を見直すことで、情報関連予算の膨張を抑える。	学校が生徒・教職員に提供するハードウェア、ソフトウェア、クラウドサービスの種類が、ここ数年膨らむ一方であるため、整理する。これにより得られる予算・人員面の余裕を、新しいサービスの提供に振り向ける。	B	A
生徒会	1. 生徒の自治組織としての意識を持たせ、それに見合う活動を行う 2. 生徒の身の丈にあった活動になるように指導する	1. オンライン意見箱、生徒会通信を通じて、一般生徒と生徒会本部役員の距離を縮める。 2. 感染症対策の緩和に合わせて、行事を従来の形に近づける。	1. 新入生歓迎会を4年ぶりに対面で実施することができた。 2. 「七夕祭」の企画実施。笹飾り・射的・スーパーボールすくいを実施、クッキング部によるゼリーの配布を行った。 3. 応援指導委員会主導による野球応援を実施した。本校生徒・保護者にも来場してもらい、4年ぶりの声出し応援を行うことができた。 4. 文化祭が対面形式となったため、文化祭企画「生徒会相談室」を実施した。 5. 「正月祭」の企画実施。おみくじ・羽根つき大会の他に、今年度からおしるこの無料配布を復活させた。どの企画も盛況で生徒は楽しんでいた。 6. 「卒業生を送る会」の企画実施。卒業式のリハーサルを兼ねる形でθ館（1部）で行った。150番教室で映像視聴兼色紙サイン会（2部）の2部構成とした。 7. 生徒主導で「能登半島地震」への募金活動を行なった。	引き続き、本部役員と生徒とのコミュニケーションを活発にし、生徒全体の自治意識を高めていくことが課題。またオンライン意見箱や生徒会通信を単発ではなく継続的に運営していくことが課題である。	一般生徒からの声を吸い上げ、改革していかうという意識は感じられるが、企画書や要望書はとても安易である。学校が置かれている現状、環境を認識し、議論した上で、問題に取り組み活動することが課題である。	A	A
図書	生徒たちにとってより利用しやすい図書室を司書の方々と協力して運営する	1. 図書委員の生徒を中心に、図書室での作業・お勧め図書の紹介などを行ない、開かれた図書室作りをしていく。 2. 図書の福袋という企画を初めて実施する（これは新しい企画である）。	1. 生徒の興味のありそうな本、司書・教員の視点での読んでほしい本などを積極的に選定し、それぞれ推薦文を書いてもらい、図書室ニュースに掲載した。 2. 生徒の図書委員会ではおすすめの図書の紹介、スタンプラリーの企画・カードの作成など、趣向を凝らした活動を行った。文化祭でもおすすめの図書の紹介をするコーナーを作った。	より多くの生徒に利用してもらえる図書室作りを目指していく。	1. 増え続ける蔵書の問題を解決し、書籍だけでなく、映像資料のさらなる充実をはかっていきたい。学年間の利用頻度の差をなくしていく方法を考えていきたい。 2. 大学メディアセンターの利用が減ってきているので、6年生の論文実習などでの利用数を増やしていきたい。	A	A
論文実習	学術論文作成に必要な以下の点を理解する 1. 先行研究が集められ、そこに述べられている見解や主張が整理されていること 2. 整理した先行研究を「批判的に」見ること 3. 他者の意見を尊重し、自他を明確に区別する方法を学ぶこと 4. 論文としての形式や体裁を知る	1. 2021年度から4単位となり、論文実習Ⅰ・論文実習Ⅱ、各2時間ずつ行う。 ①論文実習Ⅰ(Ⅰ類HRクラス単位でスタッフによる授業を行う) ・4月中は教科書『論文事始』をもとに講義を行い、論文を作成するための姿勢を学ぶ。 ・Ⅰ学期・Ⅱ学期で各1回するプレゼンテーションを通じて、「問」と「仮説」、それを結びつける「アプローチ」の論理性、一貫性を確認する。 ②論文実習Ⅱ(担当者別のクラス。授業は2クラス合同で行う) ・資料収集、プレゼンテーションのレジュメ確認、執筆にあたってのアドバイスなどの個別指導を行う。 ・下書きの査読を通じて、剽窃や形式のチェックを行う。 ・提出後に作成したパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行う。 2. 生成AIについて、不十分であること、それをそのまま論文にすることは剽窃にあたることを、全体への講義の際に確認する。	新制度も3年目となり、概ねフォーマットを固めることができた。 論文実習Ⅰ 例年通りに行うことができた。 論文実習Ⅱ 論文作成作業・担当者による面談や指導を授業時間内で行うことができ、生徒は作業時間が確保され、教員もより綿密な指導を行えている。 テーマに共通点のある生徒が集まっているので、お互いへのアドバイスなどもできた。 早稲田大学本庄高等学院との交流 今年度も相互に生徒を派遣して発表、交流する機会を持つことができた。	1. 評価基準の明確化 2. 次のテキスト改訂を視野に入れ、掲載する論文や新たな項目などの構想を立てていく。 3. 論文の電子データでの提出（生成AI対策） 4. 他校の取り組みも参考にして、改善すべき点を見つけ、よりよい「論文実習」を目指していく。	長期的には、手法としてフィールドワーク・アンケートなどを取り入れるか否か、Ⅱ類も含めた全員に研究を課すか否か、4・5年時からスタートすることが可能か(例えば論文実習基礎)否かなどについても議論が必要である。	A	A

国際交流	1. Covid-19の感染拡大に伴い全面中止になっていた短期留学プログラムのスムーズな再開 2. 英国 夏 Bury プログラムとニュージーランド Kristin プログラムに代わる新たな交流校を見つける	1. 国際交流委員だけではなく、交流先の学校と懇意にしている教員の力を借りて、再開に向けて話し合いを進める。 2. 英国とニュージーランドで、新たな交流校候補校をリストアップし、有力候補校を実際に訪問して、交流開始に向けた話し合いを行う。	1. Covid-19の余波として各国での留学プログラムに対する規制が厳しくなっており、特にホームステイに関する規定が厳しいためにプログラム自体を再開できないというケースが出てきた。カナダやオーストラリアにおいてこの傾向が見られる。また、シンガポールプログラムにおいては国の方針として短期留学プログラムの受入に後ろ向きとなったため、本校のプログラムも中止せざるを得なくなった。英国の Gresham's とのプログラムは現在のところ中止となっているが、継続して交渉中である。 2. ニュージーランドについては、Palmerston North という町にある Awatapu College でのプログラムを新たに開始することができた。継続的なプログラムとして続ける予定である。英国において新たな交流校を探すという計画は実現には至っていない。	1. 既存の短期留学プログラムを可能な限り再開できるように、交流先と綿密に連絡を取りながら準備を進めていきたい。 2. 英国 夏 Bury プログラムに代わる、夏の英国プログラムを新たに立ち上げることを目標に、候補校の選定と視察を実施したい。また、英国に限らず、その他の国にも視野を広げ、新たなプログラムを模索することも視野に入りたい。	1. 本校では留学希望者が増加傾向にあり、そのニーズに応えていけるように、短期留学プログラムをさらに充実させていきたい。 2. いくつかのプログラムが中止となるなどプログラムの数自体が減少傾向であり、今後更に充実したプログラムを提供し、生徒が国際感覚をよりいっそう身につけられるように委員会で検討を重ね、実際の交渉に着手していきたい。	B	B
施設	1. 安全を第一として、基本的な施設・設備の充実を常に念頭に置き、計画、整備を実行していく 2. 引き続き、施設・設備全体の経年による改修事案について、迅速に対応していく	1. 第3体育館の雨漏りについて、経過観察をする。 2. 新グラウンドの獲得並びに工事の事業を進める。 3. 西校舎へのひさし設置の事業を進める。	1. 第3体育館の雨漏り経過観察については、特に問題なく経過している。 2. 学校外の徒歩10分圏内に新しくソフトボール場サイズの敷地を獲得し、工事を開始した。 3. 第一体育館横から西校舎へ庇を設置する工事を開始した。	1. 第3体育館の雨漏りについては、引き続き経過観察し、問題がある場合は、関係部署と連携し、迅速に対応していく。 2. 南校舎ロッカーの鍵をダイヤルロックに変更。 3. その他、引き続き、経年劣化による備品の交換や、校内全施設における改修箇所の集約と改修計画および工事の実施。	1. 既存の施設も30年を経過し老朽化が進行している。中高、大学管財部、三田管財部など関係部署とも連携をとりながら、優先順位をつけて計画性をもって対応していきたい。 2. 6学年すべてで6クラス揃ったが、もともと教室数が潤沢ではないうえ、カリキュラムが多様化されていく中で、新棟建設、増設等も計画していきたい。 3. 気候変動に伴い、学習環境が過酷になることが予想されるため、一年を通じて快適な環境で学習活動ができるよう空調を整える。 4. 屋上に太陽光パネルを設置するなどして、教育活動に必要な全ての電力を学校内でまかなえるようにする。	A	A
BLS	1. 救助の実践を通して、緊急事態の判断、危機管理、生命の尊厳、市民の義務を根付かせる 2. 3年以内の再履修で実行能力の低下を防ぐ 3. ボランティア精神の育成 4. 教職員の受講率の向上	1. 指導員の指示に従い技術習得に励む。 2. 講習後、慶應 BLS 教育の取り組みについて説明にあわせ、校舎内に設置してある AED の場所を確認する。	藤沢市消防局、藤沢市救急救命普及推進会の協力もあり、今年度から学年全体が第3体育館に一堂に会し、実技を実施することができた。ダミーやトレーニング用 AED 等の機材も充実しており、生徒一人ひとりが時間をかけて実技に臨むことができた。教職員への受講アナウンスが出来なかった。	1. 感染症対策を十分に考慮し、一人でも多くの生徒が実技を受けられるようにしたい。 2. 教職員の受講数を増やすため、学校行事作成の際、教員が受講可能な日程に可能な限り設定をしたい。 3. 人工呼吸用キューマスクを使用した実技も再開できるようにする。	この活動は、続けていくことに意義があり、塾生塾員誰もが、手をさしのべられる環境を目指す。	B	B
年会誌	年会誌発行の期日の円滑化、及び正確さを目標とする	各担当部署からの原稿について、進捗の確認・とりまとめを行う。 ・行事ごとに原稿の依頼をする。 ・校正は年会誌担任のみならず、各クラス担任・クラブ顧問にも依頼する。	実施できた行事については積極的に記録として残すようにした。	コロナ・ポストコロナと行事の実施状況が異なったため、従来の掲載項目に戻すことを意識した。	ストレージの指定と、記録媒体の指定で、各学年の得意不得意があり、統一が取れない。「何方に書いてもよく、紙でもよい」という常態が逆に不親切であった。Google Form を用いた回収にも得手不得手があり、混乱を招いた。学年ごとに実施した時期が異なる行事もあったため、編集の仕方を工夫する必要がある。写真の集め方に工夫が必要である。	C	B

	生徒が安全かつ有意義にクラブ活動ができるよう、環境および制度を整備する	1. 各活動場所における危険箇所を調査し、安全に活動できる活動環境を整備する。 2. 新型コロナウイルス感染症の蔓延時期から減退時期にあたり、それに応じた感染症対策の縮小をスムーズに移行させる。 3. 熱中症予防などの安全対策を講じる。 4. 安全でスムーズなクラブ紹介を実施する。 5. 監督・コーチへの本校クラブ事情への理解を促し、より一層の協力を得る。	1. 前年度に続き、危険箇所を調査したが、備品の整備とグラウンド使用の過密状態による危険性が指摘され た。備品の整備については、ほぼ対応できた。 また、グラウンドについても、学校として外部の小グラウンドが確保できたため、来年度より運用が開始される運びとなり、第Ⅰグラウンドの過密状況が緩和される予定である。 2. 適宜、部長、校医と確認しつつ、対策の緩和をスムーズに移行できた。 3. 主将主務対象の熱中症対策講習会については、実施できた。 4. 従来どおりの対面でのクラブ紹介の実施を試みたが、希望クラブも少なく、また、新入生の参加希望 も皆無だったため、急遽中止となった。 よって、クラブ紹介パンフレット、ポスター掲示、各クラブの紹介動画（学年ごとに適宜視聴）によりクラブ紹介等実施した。 5. 3月に「監督・コーチの会」を実施し、資料の配布と説明を実施した。	1. 来年度以降も、施設不足解消に向けた努力は引き続き行う必要がある。 2. 数年来の課題である、教員の負担軽減を目的としたペーパーレス化だが、今年度は、あまり検討ができなかったため、来年度はその適応範囲を広げる検討を継続したい。 3. 今後も、様々な情報の伝達方法について、効率的には対面と、オンラインでの実施を継続する必要がある。	1. 安全性を高める対策については、検討と改善を継続する。 2. 生徒の活動に影響がないように教員負担を軽減する。義塾の「臨時職員制度」を有効活用し普及をより促進したい。 3. 電子署名を利用することで、紙の書類を大幅に減らす事を検討すべきである。 4. 活動場所の安全問題について、最も深刻な問題は、グラウンドの過密利用についてである。引き続き、外部施設の確保について強く要望をしていく。	A	A
広報	本校の広報に関わる業務の改良を目指して実施計画・企画・実施・評価・報告をする	1. 外部団体主催の説明会へ参加する。 2. 学校主催の説明会のスムーズな運営を行う。 3. 学校紹介には以下のものを有効に活用する。 ・学校案内リーフレット ・再構成版 Web サイト（引き続き改良に努める） ・学校紹介ビデオリニューアル版 4. 生徒による学校紹介動画を公募・審査をし、次年度からの活用に見える。	1. 4/29（祝） 神奈川私立中学相談会 7/1（土） JOBA「学校フェア」（オンライン） 7/29（土） 早稲田アカデミー・首都圏模試センター共催（海外子女教育振興財団協力）帰国生対象 学校説明会・個別相談会 2. オンライン開催（一定期間視聴可能なオンデマンド配信）と、オンライン併用の対面開催（mirai compassによる事前申し込み・定員制の校舎見学会）を組み合わせ、以下の日程（すべて 150 番教室）で実施した。 7/8(土) 中・高午後 7/22(土) 中・高終日 9/9(土) 中のみ終日 10/14(土) 中のみ午後 3. 校舎見学会参加者に対し、各家庭にリーフレットを 1 部を配布した。 4. Web サイトについては、コロナ禍で未撮影だった施設の写真や、コロナ禍を感じさせるマスク着用の写真の再撮影および差替えをおこなった。さらに改訂当初からの予定に沿って、「在校生の声」の追加 1 名（6 年女子帰国）の取材を行った。また、同窓会と連携することで「卒業生の声」の追加 3 名を行った。 5. 学校紹介ビデオリニューアル版を昨年度（2022 年度）からを引き続き活用した。 6. 生徒による学校紹介動画の公募し、多くの力作が集まった。	1. 以前から参加している JOBA の「学校フェア」がコロナ禍から継続してオンラインであること等から、帰国生向けに早稲田アカデミーの帰国生対象学校説明会への参加を増やした。 2. 生徒スピーチ提示方法の変更を検討する余地はあるが、引き続きオンライン併用の対面開催（予約・定員制）で実施する方向で考えたい。 また、昨年度から秋以降の見学会出席率が減少傾向にあったため、10 月は中のみ開催としたが、今年度は文化祭の定員制がなくなったこともあり、文化祭直前開催回の出席率は予想通り著しく低かった。（中等部 89%→82%→80%→67%程度） 引き続き実施時期や実施回数、申し込み締切り時期と条件設定などの改善・検討が必要である。 3. Web サイト内にある学校案内（リーフレット電子版）の併用を SDGs の観点からも意識的に目指す。 4. 「卒業生の声」を入試広報のみならず、在校生に向けても伝えられるように、今まで以上に同窓会と連携し、同窓会の web サイトと併せた充実を目指す。 5. リーフレット、Web サイト共に、2022 年度使用開始のため、小さな改定をしながらブラッシュアップを図る。 6. 生徒による学校紹介動画の公募作品は 2024 年度からの使用を目指す。	本来の学校生活の様子を素材とした資源作りを近い将来行う必要がある。その際には入試形態の変更に配慮しながらも、横浜初等部受け入れ後の教育目標・教育内容を発信し、学校の良さがわかるように学校内外への広報体制を充実させなければいけない。 現在見学会時に配付している学校案内リーフレットや見学場所案内など、タブレットやスマートフォンから QR コード読み取りによってアクセスするなど、紙資源の節約を図ることができると同時に、学校案内リーフレット電子版の活用につながる。	B	B

現在見学会時に配付している学校案内リーフレットや見学場所案内など、タブレットやスマートフォンから QR コード読み取りによってアクセスするなど、紙資源の節約を図ることができると同時に、学校案内リーフレット電子版の活用につながる。

芸術鑑賞	人生をより豊かなものにするために、質の高い芸術に接する [3年間のローテーション（クラシック音楽→日本の古典芸能→ミュージカル・オペラなど）で、多様なジャンルに接する機会を設けている。今年度は歌舞伎を観劇した]	【歌舞伎観劇】 実施日：中等部 2024年2月6日(火) 高等部 2024年2月7日(水) 開演 11:00 終演 15:40（幕間2回を含む） 演 目 十八世中村勘三郎十三回忌記念追善 猿若祭二月大歌舞伎 一、新版歌祭文 野崎村 〈幕間 35分〉 二、釣女 〈幕間 20分〉 三、籠釣瓶花街酔醒 序幕 吉原仲之町見染の場 より 大詰 立花屋二階の場 まで 会 場 歌舞伎座	今年度のジャンルは古典芸能で、3年前は落語を鑑賞したので、今年度は歌舞伎観劇とした。 2月公演が「十八世中村勘三郎十三回忌記念追善」ということで、第一線で活躍されている著名な役者の演技を観劇することができた。 生徒たちは概ね真剣に観劇していた。内容は多少難しかったが、イヤホンガイドの解説もあったので、多くの生徒が内容を理解できていた様子である。	次年度のジャンルはミュージカル・オペラで、高等部はオペラ（7月）、中等部は演劇（2月）鑑賞を予定している。	チケットの販売方法や公演内容(歌舞伎やミュージカル)によっては費用が高価な場合がある。今までは3年間で15,000円(年平均5,000円)の予算で行うように調整してきたが、今のレベルの内容を維持するためには、今後は費用の見直しが必要である。 芸術鑑賞会が実施可能な時期は、7月期末試験後または2月入試期間中である。今年度は2月に実施し、参加生徒の人数把握や準備など余裕をもって行うことができた。 演目の種類によっては、時期が限られるものがあるが、当面は7月または2月の実施を目指す。	A	A
自己点検	1. 教科、委員会が、教育活動の内容について評価する仕組みを設け、本校の教育水準が向上し続ける為の補助的手段を提供する 2. 活動内容の重複や効率性の検証材料を提供することで、円滑な学校運営に寄与する	1. 各年度における教科、委員会の活動内容をまとめ総括を行う。 2. 各組織の目標設定、活動内容の評価と改善の記録が適切になされているかを確認する。 3. 保護者の学校に対する満足度を測るために、有効なアンケート項目を設定する。自己点検で得られた情報を基に、他教科、他委員会相互の情報交換を促す。公表可能な学校評価資料を作成する。	現行の評価方式による作成方法が定着し、スムーズな書類作成で予定が達成された。2018年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施した。手順としては、保護者世話人の37名に本校ホームページの学校評価一覧をご覧頂き、各教科、委員会の評価が適切に行われているかの設問に4段階評価で回答して頂いた。	1. 評価書類作成の内容や作成の仕組みについて、教員の、特に年度末の他業務への影響を考えると現行の方法が最良であると考える。今後も各組織が自己点検・自己評価を材料に議論を促す仕組みを検討していく。年度間の担当者変更の際にも活用していく。 2. 保護者から目標設定と結果の数値化を求める意見もあったが、教育活動は必ずしもデータとして目標設定、結果をすることが適切とは言えず、今後も各教科、委員会で記述式の評価と分析を継続していきたい。	文科省「学校評価ガイドライン」平成28年改訂で、小中一貫校における教育目標の設定などについて示されている。横浜初等部との連携の中で、学校評価に関して文科省の指針である義務教育9年間の目標設定に加えて、本校においてはさらに高等部3年間、計12年間の中での段階的な目標設定について議論していく。学校評価が形骸化しないような取り組みは常に必要である。	B	B
1年生旅行	1. 富士吉田ホールアース自然学校でのクラストレッキングや樹海探検、チームビルディングなどを通して、富士吉田の自然や歴史、文化を学ぶ 2. これらのプログラムによって集団生活のルールを学び、規律ある行動を身につけるとともに、友達と協力して一つのことを成し遂げる力をつける	1. 事前学習として理科の授業で富士山について学ぶ。 2. 樹海、紅葉台トレッキングを通して美しい自然景観やそこに息づく動植物などの観察をする。 3. チームビルディングを通して、目標を達成できるようチームで協力し、メンバーのスキルや経験を最大限に活かすことで組織の力が最大化することを体験する。 4. 飯盒炊きを通して、仲間意識を高め、集団の中の自分の役割について学ぶ。	1. 各プログラム、ホールアースの丁寧な指導のお陰で、無事に遂行することができた。 2. 前半組、後半組それぞれ充実した時間を過ごすことができた。 3. 集団生活を通して、うまくいかないこともあったが、自分の役割を認識し、行動しようとする姿が見られた。	1. 来年度は、今回の反省を活かし、より良いプログラムになるよう、事前指導の段階から計画的に進めていきたい。 2. 食事の面でアレルギー対応の連絡が旅行業者、ホテル、食事場所間でうまく連携できなかったため、改善する必要がある。	1. 6クラス同時に旅行を実施することが最善であると考えている。よって、宿舍の変更、もしくは、目的地の変更を検討することが引き続き必要である。 2. 現在の行程で続行していく場合、雨天時の代替プログラムの充実が今後の課題である。	B	B
2年生旅行	1. 東北地方の自然・歴史・文学・風土を学ぶ 2. 集団行動の意義を理解する 3. 防災学習・復興支援プログラムに取り組む 4. 現地の方々との交流を通じて地域文化の豊かさを実感する 5. クラスや学年内のコミュニケーションを深め、新しい仲間をつくる	1. 1班は月火水木、2班は火水木金の行程とし、宿泊地を花巻1泊、宮古2泊とする。 2. 平泉、遠野、三陸鉄道、東日本大震災について事前学習を行う。 3. 国語科での学びと見学地をリンクさせる。 4. 郷土芸能や郷土料理等を通して郷土文化への理解を深めさせる。 5. 各教科で学習した内容に触れさせる見学地や体験プログラムを用意する。	1. 行程通り、無事に終えることができた。 2. 集団行動での基本となるようなことを確認し、仲間との親睦を深めることができた修学旅行となった。 3. 事前学習で学んだ平泉、遠野を実際に訪れることで、各訪問地に関する理解をより深めることができた。 4. 2日目の震災学習列車乗車、3日目の田老地区での震災遺構見学で有意義な震災学習となった。	1. 2024年度は3クラス追いかけ型で、花巻1泊、宮古1泊、盛岡1泊の形に変更したい。グリーンピア三陸みやこのキャパシティを勘察し、2班同時宿泊は厳しい状況から3泊目を盛岡に変更したい。3日目の浄土ヶ浜終了後、盛岡まで移動するプランを検討し、実施したい。 2. 2日目、震災学習列車のルートを2022年度に実施した盛一釜石間に変更したい。そのため、遠野ふるさと村をなくし、昼食場所を遠野市立博物館近くのあえりお遠野としたい。また、ふるさと村廃止に伴い、花巻市内の記念館もしくは博物館の追加を検討し、実施したい。 3. 3日目の田老地区震災学習において、田老観光ホテルでの震災映像の鑑賞をこれまでは禁止としていたが、希望者のみ視聴可とすることを検討したい。	すでに震災から10年以上が経過しており、これからの生徒たちは東日本大震災を体験していないことになる。そうした生徒たちへの効果的な震災学習を考えていく必要がある。	B	A

3 年生旅行	【2023 年度 3 年旅行の目的】 1. 平和について考える 2. 瀬戸内および四国の歴史、文化、自然に触れる 3. 事前学習と現地での学習を総合した学びを行う 4. 集団の中で他者と協力し合うことを学ぶ 5. それぞれの場でのルールを尊重し、社会の中での規律ある行動をとるよう徹底する 【教員】 1. 生徒が知的好奇心をもとに行程をすすめることをめざす 2. 事前学習・旅行中のしおり記入、事後学習いずれにおいても、主体的に調べ、現地での体験を大切に、友人やクラスの人と共に学びを深めることをめざす 3. これまでの知識と、旅行で出会った新しい視点や知識を融合し、さらに考えてみることをうながす	【目的地】 広島お好み村 / 広島平和記念公園・資料館・被爆講話 / 厳島神社・宮島 / 松山市内班別研修 / 瀬戸大橋記念館・瀬戸大橋タワー / 中野うどん学校(体験) / 金刀比羅宮 / 高知県立牧野植物園 / 桂浜 【主な事前学習】 1. 旅行のしおりクラスページ作成： クラスのオリジナリティを出した、旅行前に読んでも旅行中に読んでも楽しく役立つページをめざす。 2. パネルディスカッション形式（社会科教諭 2 名による）： 国際情勢の近況により、平和の概念も日々変容している。従来の平和学習にも重点の置き方に変化が必要とされると判断し、2023 年度は、「平和学習を問う」というタイトルのもと、「平和」の概念を生徒それぞれが主体的に考えるきっかけとなることをめざした、パネルディスカッション形式の授業を行う。なお、2023 年は広島サミットの年である。 3. 古文の授業：厳島神社・宮島・金刀比羅 4. 日本史の授業：松山・桂浜 5. 松山班行動計画立案作成 6. 生物の授業：牧野植物園 生徒全員のシロツメグサのスケッチを牧野植物園に送付し、学芸員から直接助言をしていただく。 7. 牧野富太郎及び牧野植物園に関する映像視聴・朝ドラ「らんまん」14 話（植物学）視聴 8. 国語の読書課題： ・伊東壮「1945 年 8 月 6 日:ヒロシマは語り続ける」※社会科副読本 ・夏目漱石「坊ちゃん」※国語科副読本 ・生徒各自の興味に基づいた四国・広島に関する書籍の読書（3 冊） 9. 旅行レポートの課題： 生徒が各自設定する。インターネットや文献だけでは調べられないことを選ぶ。 ・旅行前の疑問（観点をひとつ決める） ・旅行中、特に着目しようと思っていること 【旅行中のしおり記入項目（抜粋）】 現地での一日一日の体験をしおり記入時に振り返り、再度体感すること、旅行で出会った新しい視点や知識を融合しさらに考えてみることを促すべく、次のような項目を設ける。 ● 何が心に残りましたか。①心に残ったこと ②考えたこと ● 心に残った今日の風景 ● 今日いちばん美味しかったもの ● 本日の一句〈一句詠んでみましょう〉 ● 見学して初めて知ったことは何ですか。 ● 発見したことは何ですか。 【事後学習（レポート作成）】 ● 旅行前の疑問 ● 旅行中、特に着目してこようと思っていたこと ● 行ってみて分かったこと ● 今後さらに深くまたは広く調べてみたくなったこと	前半 3 クラス、後半 3 クラスいずれも、行程通り無事に 3 泊 4 日の旅行を実施できた。 【2023 年度 3 年旅行の目的について】 1. 事前学習で実施したパネルディスカッションの成果もあり、熱心に話を聞き学習することができていた。特に広島平和記念公園でのガイドツアーと被爆体験講話では全員が真剣に耳を傾けていた。 2. 積極的にガイドの話聞き、生徒自ら主体的に学ぶことができた。 3. 事前学習の内容と実際に現地で見聞きしたことをリンクさせ、教科横断的な学びにも繋がった。 4. 宿泊先や、行程中に訪れた様々な地で集団の中の個人を自覚し、生徒がお互いに協力して学びあおうとする様子がみられた。 5. それぞれの場でのルールや、社会通念を意識し、それに応じた適切な振る舞いをしようと試みていた。	1. 今年度、瀬戸大橋記念館を訪れたが、瀬戸大橋に関する事前学習が不足していた。リニア計画や、本州と四国が橋で繋がったことの意義を事前に学習しておき、現地での学びをもっと深める必要がある。 2. 宮島港フェリー乗り場まで、ホテルから徒歩で移動したが、歩道が狭く大人数で移動するには注意を要した。来年度同じ宿泊先、行程をたどる場合には工夫が必要である。 3. 牧野植物園において希望生徒はバックヤードを見学することができた。貴重な施設見学をすることができて生徒は大変充実した時間を過ごした。その一方で、見学に参加した生徒は牧野植物園の売店に訪れる時間はなかった。売店にて販売されている品物も、学びにつながるものが多いため、バックヤード見学に参加した学習意欲の高い生徒には配慮が必要である。	帰国生の多い本校において、平和学習を多角的な視点から行うことは意義あることであり、旅行と結びつけた事前学習の設計は今後も工夫の余地がある。食物アレルギーをもつ生徒が過去と比較すると増加しているように感じられるが、アレルギー調査・対応に関してスムーズなスケジュールや調査用紙の設計の必要がある。	B	B
--------	---	--	--	---	---	---	---

4 年生旅行	1. 北陸を軸とした中部地方の各地を地学、地理学、民俗学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶ 2. 事前学習と現地での見学を総合し、自発的に探究する 3. 集団生活を通して、協調性や規律性を身に付ける	2019 年度まで実施していた高山泊を含む 3 泊 4 日の行程に戻す。 ・事前学習 1. 特別カリキュラム期間中に地学・地理学的な視点で授業をおこなう。 2. 「石川の工芸」「石川の食」「石川の歴史・文化」について、出発前にオンラインで現地専門家による講演をおこなう。 ・事後学習 .事学習と現地での見学を総合したレポートを作成する。内容は、各自が設定したリサーチクエストに沿ったものとする。	インフルエンザが流行し、出発前約 1 週間、学年閉鎖状態での旅行となった。その影響か、1 班では 3 日目以降発病した生徒が数名途中離団し、帰宅することとなり、対応に苦慮した。 2 日目の選択コースのうち、交通ルールを守らないなど不適切なガイドがいた。 3 日目の選択コースでは 2 班は一部雨天コースとなってしまった。立山カルデラコースの雨天コースは検討を要する。神通川の雨天コースの神岡ラボはよかった。	引き続き、事前学習も含めて、北陸を軸とした中部地方の各地を地学・地理学・民俗学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶことを考えている。 北陸新幹線の敦賀駅延伸に伴い、福井県での学習など、行程に取り入れる学習コンテンツの選択肢が増すことが期待できる（例：福井県立年縞博物館）。ただし、旅行者の提案を鵜呑みにするのではなく、教員による見学地（学習コンテンツ）の精査は不可欠である。そのための、実地調査機会の確保など、新コース開拓に向けた教員のサポート体制を強く要望する。 食事のアレルギー対応について、インシデント直前の事象が発生した。改善が必要と認識している。	基本的に 4 年生の事前事後学習も含む旅行内容は完成度が高いと考えている。しかし、現行の目的にとらわれず、宿泊地や見学地の検討の継続は必要である。 また、荒天時のリスクに加え、近年感染症流行のリスクやアレルギー対応の増加なども加わり、考慮すべき要素が煩雑になり、業務量が肥大化しているため、教員が対応しきれなくなっている感もある。全学年が、毎年、同時期に旅行を実施すべきなのかどうか、検討するべき時が来ていると感じる。	B	B
5 年生旅行	1. 国際化しつつある現在、歴史の深い京都・奈良は日本人として一度は訪れるべき場所であり、事前学習も含め、その史跡や文化財に触れる 2. 班別自主研修によって、仲間との協調性や自主独立の精神を養う	1. 今年度初めての試みとして、以下の 6 ヶ所に分かれて伝統工芸学習を行った。 ①宝蔵院と萬福寺（明朝体および原稿用紙の元祖となった経典の版木の説明・見学） ②松久宗琳佛所（仏像製作・修復や曼荼羅製作の見学） ③光峯錦織工房（古い機織り機や復元した布、国等に納めた作品の見学／機織り体験） ④大徳寺大仙院（座禅／茶室と庭の見学および解説／お抹茶） ⑤雲楽窯（ろくろでの陶器等作成の見学と説明／手びねり体験） ⑥川面美術研究所（文化財修復の見学／板に岩絵の具等で絵を描く体験） 2. 事前学習として、自分が研修に行く伝統工芸に関する用語について調べる。 3. 京都（1 日半）および奈良（半日）について、班別で行動計画表を事前に作成し、班ごとに計画表に沿って自主研修を行う。 4. 旅行前に得た知識と現地で見聞きしたことをつなげて得た考察を、新聞という形で作成し、提出する。	1. 伝統工芸学習についての研修は今年度初めての試みであったが概ね無事に終了することができた。公共交通機関を用いての現地集合であったため、多少の遅れなどが発生したが、先方にも臨機応変にご対応いただいた。 伝統工芸学習の内容としては非常に充実しており、生徒たちも古くから守られてきた文化に対して誠実に向き合うことができた。 2. 事前学習として提出した用語の意味調べから、優秀作品を選び、学年として 1 つの辞典を作成し、しおりに掲載した。 3. 行動計画表の作成については、コロナの影響もありこれまでの経験が少なかったことから苦労している面もあったが、試行錯誤を重ねながら案をまとめることができた。 当日の研修については概ね計画通り実施することができた。 4. 事後学習の新聞作成では、単なる「報告」ではなく、見聞きしたことを自分の考えと照らし合わせてアウトプットすることができた。	1. 伝統工芸学習の訪問先が、公共交通機関では行きにくい場所も多く、各担当教員も個別に行動していて対応することが難しいため、貸し切りバス等で研修先ごとに行動することが望ましいと考えられる。 2. 最終日は長谷寺・室生寺を巡ってから、名張駅より近鉄特急（車内で昼食）で名古屋まで向かい、名古屋から新幹線に乗って新横浜に帰着するという行程だった。 新横浜には 15:54 着と少し早めの解散だった。 最終日に京都での伝統工芸学習を行うなどの行程変更を行い、京都で昼食／京都から新幹線で新横浜まで直通にすることで、現地での研修により多くの時間を使うことができると考えられる。	1. 伝統工芸学習については、今後も続けていくのであれば行先や学習内容、行程のどこに組み込むかについては検討を重ねていく必要がある。 2. 班別研修について、生徒間の知的好奇心の方向性のずれから、計画および実行することが困難になっている面も感じられる。 京都・奈良の行先も含めて、班別研修の必要性（頻度）について、生徒たちの状況を見ながら検討を重ねていく必要がある。	B	B

6年生旅行	1. 北海道に関して歴史・文化・現代社会的観点を学ぶとともに自主研修によって協調性や自立の精神を育む 2. 単なる旅行ではなく「総合的な探究の時間」としての旅のため、事前事後学習とリンクさせての総合的な学びを目標とする	1. 旅行実施の10月にコロナが収束に向かっているという条件で、従来の4泊5日から1泊減らし、3泊4日で実施する 2. 事前学習として見学地に関連したレポートを作成させる。事後学習として実際に見学してきたことを踏まえ、同じテーマに考察を加えたレポートを作成させる。テーマは、訪問地の函館、札幌、小樽の歴史や都市性などの社会科学系、あるいは鮭の生態、昭和新山・有珠山など自然科学系から選択させる。 3. 自主研修に向けては、班で事前に綿密なスケジュールを考えさせる。旅行当日の行動を充実させるため、所要時間や必要な金額なども記載した計画表を提出させる。	1. 総合的に充実し、貴重な旅行になった。 2. 4泊の北海道から3泊に変更となったが旅行中・旅行後の生徒の様子からは満足度は高かったように思えた。 3. 事前事後学習では多くのモノ・コトを見て深く広く考察できていた。 4. 最終日に発熱者が数名出てしまったが、教員、部長（現地）、校医で対応にあたり、保護者も適切に対応してくれた。 5. 自主研修も計画通りに進められた。各日の集合時間にもほとんどの班が遅れることなく集合したため旅行全体のスケジュールも変更なく進められた。 6. アレルギーに対して重篤な症状を起こす可能性のある生徒が多かったが、十分に注意を払っていたためアレルギー反応が出た生徒はひとりもいなかった。 7. 旅行会社の対応は前年度より良かった。 8. 担当教員で下見を行ったことで旅行会社との打ち合わせもスムーズに進み、旅行の成功へと繋がった。	最終学年として深い学びを期待したいが、限られた日数での都市中心の訪問では、事前学習→訪問→事後学習で「北海道」らしさを学ぶには限界を感じた。 1. アイヌ関連施設「ウポポイ（民族共生象徴空間）」は内容が豊富で充実していたが曜日によって開催されないブースもあり、その場合どうすべきか要検討である。また、昭和新山・有珠山コースも評価は高いが、悪天候、特に雷雨が起こることを念頭に置き、雨プランをどうするか考察する必要がある。 2. 今年度の自主研修では札幌＋小樽コースであったが、どうしても札幌の研修時間が少なくなるため、札幌をコースから外すことも踏まえないといけない。 3. 「サケのふるさと千歳水族館」での体験学習は、解説も含めて学習効果が高いので次年度も実施するべきである。今年度は滞在時間が短かったため時間については再検討の必要がある。 4. 函館山の夜景は今後インバウンド需要が回復すると大混雑が予想されるため、その対応が必要である。	昨年同様最終学年の総合的学習の集大成としては旅行先の再検討が必要である。 北海道の主要都市の観光が中心の現状では、北海道の自然や文化を学ぶ機会が少ないばかりか、社会系の学習課題も実は他学年と比較しても設定が難しい。行先を北海道で継続する場合でも、行程の大幅な変更を考えてはどうか。バス移動が長く、時間に大幅なロスがあることは懸念材料であるが、以前の道東方面など自然科学系の学習に主眼においたコースの復活も考えるべきである。または平和学習を含めた歴史・社会的学習や特徴的な自然体系による自然科学的学習も充実させられる沖縄・九州も視野に入れるべきである。	A	A
未来の学校検討委員会	1. 本校は開校からすでに30年以上が経過しているので、これからの本校のあり方を検討するにあたり、「社会的責任を自覚し、知性、感性、体力にバランスの取れた教養人の育成」という本校の目的について再考する 2. 本校の目的を達成するために必要となる、新たな教育の柱・アイディアは何であるか検討する 3. 新たな教育活動を次々と加えていくばかりでは、限られた人的リソースで対応していくことは不可能なので、現在行っている教育活動の何を削減していくべきか検討する	1. 「社会的責任」「知性」「教養」が何を意味するのか議論し、本校の目的をより明確にする。 2. 本校の目的を達成するための新たな教育活動について議論し、提案をする。 3. 新たな教育活動を行うために、現在行っている教育活動の一部削減について議論し、提案をする。	1. 社会的責任、知性、教養について以下の共通認識に達し、本校の目的をより明確にすることができた。 社会的責任： ・社会の先導者として社会全体をより良いものにするために行動すること。 ・社会貢献に対する積極的な姿勢を有すること。 ・自己の利益のみを追求するのではなく、全体の発展、幸福向上を考えること。 知性： ・他者への依存・忖度から離れ、培った教養・知識を結びつけて、自分で考え、判断する力。 教養： ・幅広い分野における知識、それらによって生み出される心の豊かさ、品格。 ・知識に加え、それを繋ぎ合わせる構想力、新たなものを生み出す発想力・創造力。 2. 本校の目的達成のための、新たな教育活動として、以下の提案を行った。 ①高校版インターンシップ ②社会体験活動・ボランティア活動 ③SFCキャンパス内で大学との連携強化 3. 現在行っている教育活動の一部削減について議論し、以下の案を考え出すに至った。 ①クラブ活動の段階的な削減、もしくは再検討 ②学校行事の精選・特色化 文化祭および体育祭のあり方の再考（廃止も含めて） ③旅行のあり方：中は目的の明確化→プログラム・実施時期の再検討／高は選択制への移行・留学プログラムで代用できるような制度設計が望ましい。	1. 本校の目的達成のために提案した、新たな教育活動について、教員全体での議論を深め、実際に実施可能な教育活動を選定し、どのように実施していくのかを具体的に決めていく必要がある。 2. 現在行っている教育活動の一部削減案について、教員全体で議論し、理解を得た上で、必要に応じて削減・再検討を進めていく。	本校を取り巻く状況の変化に応じ、本校の目的を達成するために、生徒が社会と接続し、探究する中で自ら行動し、教養人としての己を高められるようになり、新たな教育活動を引き続き提案・実施していく。 限られた人的リソースで実施可能な教育活動には限りがあるので、カリキュラムオーバーロードを避けるために、クラブ活動や学校行事の再検討・削減のみではなく、将来的にはカリキュラムの再編成についても検討していく必要がある。		A